「ノアの方舟」と「稲むらの火」の間
―災害情報の広報戦略―

関谷直也（東洋大学）

naoya@toyo.jp

1　何のための情報発信か

・「次の災害」とは限らない、「次の災害」ではない可能性が高いことが伝わっていない。

・浦和高校　南伊豆町での臨界学校の中止（二分で到達する第一波の津波に対応できない）。

・土地価格の下落→リスクと感じるようになった証拠／意味が伝わるかどうか。

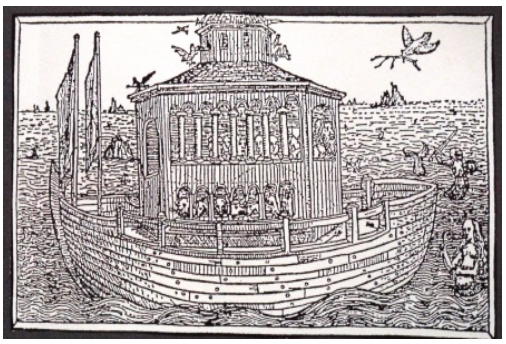
・情報量「０」の課題　想定が過少評価ＶＳ想定が過大評価

$H(X) = -p\log p - (1-p)\log(1-p)$　（ $p=0 \vee p=1$ ）　⇔　$H(X)=0$

・「最大クラスの被害想定」のさらなる拡大（2013 年 7 月 15 日朝日新聞）

・一方で混乱／一方で無視

2　「ノアの方舟」と「稲むらの火」



・黒海洪水説（現在の黒海が形成された際の洪水説）、エトナ山噴火に伴う津波説

・旧約聖書「創世記６章９節」のノア・ギルガメシュ叙事詩のウトナピシュティム（紀元前 3000 年～紀元前 2600 年頃、古代シュメールで大洪水が起こり、後に、ギルガメシュ王が統治した）

・字が読めない／文明の隆落

・「ノアの方舟」と「稲むらの火（1854 年：安政南海地 震／1707 年：宝永地震）」の間

・ヴェーバー・フェヒナーの法則

3　社会への適切な発信：リスク論の問題ではなくマーケティングの問題

・「地震学のサイエンス・コミュニケーション」と「防災対策／防災研究」との混同

・ステークスホルダーの理解：受けとり方を想像しない情報発信こそが問題

・受け手に責任を転嫁している。：ＳＶ／ｂｑを伝えれば、人々はリスクを理解できるのか／受け取る人の恐怖心は一様か

・比較リスク論：「10 万分の１」の原子力発電、「1 万年に１回」の大規模噴火、「1000 年に一度」の津波

・広報戦略がない：視聴率を考えない放送、広告効果を考えない広告

・きわめて確率の低いハザード事象を理解させるには別のロジックが必要である。